
夜と秘密とお楽しみと

鷺嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜と秘密とお楽しみと

【Zコード】

Z8046Z

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

漢には漢の付き合いというものがあるのです。でも、それが彼女にとって許されるかは別問題で……。

暑い！

とにかく暑い！

今年の夏はとにかく暑い！

いつも年に限ってエアコンも扇風機も壊れる！

都会でエアコンなしで過ごせなんて、自殺行為だ！

葉月生まれの葉月育ちの私にとって、実家というか、帰省すると

いつも葉月。

つまり、帰省で涼しいといじらぐ。なんてことがない！

沿岸部である葉月はとにかく暑い！

おかげで私の家は蒸し風呂状態だ。

お父さんはお盆返上で仕事というナビ、職場はクーラー効いてるだらうし……。

お母さんは元々暑さが平氣というし、お父さんが買った子供用プールではしゃぐ葉子がうらやましい。

「本当……あんなに真っ黒になつても何の心配もいらないんだものねえ」

水を張ったタライに足を突つ込んだお母さんが、葉子を眺めながら縁側からため息をつく。

「クーラー買おうよ……」

「お父さんのボーナスが少なかつたから仕方ないでしょ？」

お母さんは団扇をパタパタさせながら言つた。

「……それとも、クーラー分、あんたの小遣いからさりぴいてもいいつていうなら、話は別だけど？」

そんな夕方。

私は葉子を連れて水瀬君の家に遊びに行つた。

カナカナカナ

少し時季外れのヒグラシが鳴く夕暮れ。
さすがにこの頃になれば幾分涼しい……はずなのに。

「暑い」

私は汗を拭いながら石段を上りきつた。

本当、この石段、急だし段数多いからイヤ。
何で葉子が平気なのか、不思議でならない。

「到着う！」

最後の石段を登りきつた葉子がバンザイの姿勢で大声でそう叫つた。

その声が聞こえたんだろう。

玄関先で水打ちをしていたルシフェルさんが微笑んでいた。

庭ではすでにみんなが集まっていた。
羽山君と涼子さん、秋篠君に水瀬君。南雲先生に末畠といつこつ

もの面々の他に、めずらしい人がいた。

品田君だ。

「おひ。 来たか」

「こんばんわ。葉子ちゃん。随分真っ黒になつたわねえ」

羽山君と涼子さん、そろいの浴衣姿。うーん。涼子さんのオトナの色気はマネ出来ないなあ。

その涼子さんにアタマをナデナデされた葉子は「満悦だ。

「葉子ちゃん? 後で花火しようか」

「いいの?」

「うん。 お姉さんが花火用意してあるからね?」

「うんつー」

「へえ? これが桜井の娘か」興味深そうに葉子のアタマを撫でたの

は品田君。

「妹だつて」

「ま、どつちでもええがな」「えくない！」

「葉子ちゃん。初めまして。」「ージー品田や

「品田……おじちゃん？」

「誰がやねん！」

軽い突つ込みに葉子はおもろがつてこる。
手のスナップを一生懸命マネしようとしている。だめよ葉子。教育上マズイから。

「関西人のシッ」「」を教育上悪いと何事やねん！

「そう言えば品田」思い出したように羽山君が言った。

「お前、実家大丈夫なのか？」

「ああ。ええねん」品田君はうんざりした顔で言った。

「このクソ暑い中、法事でかけずり回らされたら身がもたんわ」

「あれ？ 品田君の実家つてお寺？」

「ああ。桜井、知らなかつたのか？ ローリンの家、かなりデカイ寺なんだぜ？」

「じゃ、跡取り」「

「ワイは跡なんてとらん」品田君はきつぱりと言つた。

「弟がおる。アイツが跡とればええ」

「賢兄愚弟の正反対」イタズラっぽく涼子さんが呟つ。

「姉さん……そりやキツツイで」

「でもその方がいいわ」私は言った。

「品田君がお経なんて唱えたら、仏さんことひや、漫才聞かされてるようなものよ。絶対」

「なんでやねんつー」

……だから葉子。そのシッ」「」、マネしちゃダメだつて。

そんな時、

「羽山！」

南雲先生が裏手から持つてきたのは、長い竹。

「そつち持つてくれ！」
「ウッス！」

その間に秋篠君がホースで水を用意している。

そう。今回の集まりはズバリ“流しそうめん”。

やつぱり、これが日本人の風物詩だと思つ。

水瀬君が味を全部調合したといつけど、そうめんは本当に絶品だつた。

みんなで代わる代わるに流す当番についてそれを順番に食べたり、流させてくれたり、一番に食べさせてくれたりと、葉子をみんなが可愛がつてくれたのが、姉としてとても有難かった。

みんなに感謝！

「はあ……喰つた喰つた」

食後は、冷えたスイカをかじりながらみんなで騒ぐ。
「やつぱりい、みんなで食べると美味しいよねえ」

未亜じやないけど、その通りだと思つ。

葉子が花火を楽しんでいるのを見ながら、私は未亜に言つた。
「流しそうめんなんて、本当に誰が考えたんだろうね」
「企画は私じやないよ？」

「そうなの？」

「へンだな。

」「いつの、一番に考えそなのは未亜なのに。

「誰？」

「羽山君」

「へえ？」

一瞬、涼子さんの手料理に飽きたのかな?と失礼なことを考えた

けど、そんなハズないし。

「羽山君がねえ」

「うん。夜は、男同士で騒ぎたいっていつのもあるみたいだけど」

「それって」嫌な予感がした。

「お酒?」

「南雲先生が大目に見てるんだから……いいんじゃない?」

教師公認の未成年飲酒……いいのかなあ。

夜 葉子は八時過ぎには寝てしまつたけど、私達の時間はこれからだった。

葉子と一緒に寝てしまおう。

私はそう思つたけど、逃げられなかつた。

何が起きた?

……夏の夜風物詩だ。

ホラー映画鑑賞会。

「だからー。」

私は泣きそうになりながら嫌がつたけど、結局最後までつき合わされた。

みんな、葉子にはあんなに優しいのに……ヒドイ。

そんな中、妙に気になつたことがあつた。

何だか、一緒に見ている男の子がヘンにソワソワしている。

女の子と一緒に。

何かやましいことでも企画しているんだらつか?

そう考えたけど、すぐに否定した。

羽山君は涼子さん。秋篠君はルシフィールさんという、熱愛中の相

手がいる。考えられない。

ホラーが怖くてちらちらと見ていたけど、特に羽山姫と畠田君が中心らしい。

耳をそばだてていたら、

デッキ。

お楽しみ。

集合。

そんな言葉が聞こえてきた。

何を意味するかわからないけど、別に誰かに被害がなければそれでいいかな。と、私はあまり気にしなかった。

とこづよつ！ホラー映画なんて何で見たがるのよおつ！

夜、女の子はみんな同じ部屋で寝た。

みんな平気な顔で寝てるけど、ホラー映画なんて見せられた私は、怖くて眠れない。

「ううう……暗闇が怖い。障子の向こいつから何かが来るようでヤダ。きつく田をつむつて羊の数を数えるけど、どうじょうもない！」

「眠れない？」

心配そうな声をかけてくれたのはルシフールさん。優しいな。

「う……うと」

「映画のせい？」

「う……うと」

「ラブロマンスで興奮した？」

「あ、あれホラー！」

「えつ？」ルシフールさんはちょっと考えてから言った。

「ああ。でもラブロマンス要素も強かつたでしょうっ。私、感動したけど

「私は気絶しそうだったよ

「ふふつ……大丈夫だよ」そつ。トルシフュルさんの手が私の額に触れた。

「うー」。対霊防御スゴイから、下手なオバケなんてあの石段を越えることすら出来ないんだから

「そ、そつは言われても……

むくつ。

突然、布団から起きあがったのは涼子さんだ。

「う、ごめんなさい。起こしました?」

私はすぐにお詫びしたけど、

「ううん? ずっと起きていた」

涼子さんはそう言つて静かに立ち上がつた。

「ど、どひしたんですか?」

しつ。

涼子さん、口元に指を立てて言つた。

「どうもおかしいのよ 光信の様子が」

そおつ。

私達は足音を立てないよう、静かに廊下を歩いた。

「昨日、品田君からメールが入つてからなのよ」

涼子さんは小声で言つた。

「それで突然、水瀬君や秋篠君と連絡とりあつて、それでここに泊まることになつたの」

「そういうえば、決まつたのは急でしたね」トルシフュルさんも不思議そうな顔をする。

「でしょ? それに」

「それに?」

「品田君の持つてきた黒いバックの中身を見て品田君だけ? 彼と笑い合つていたし」

「そりや不気味だ。」

「じゃ、羽山君達」

「うん」「

「いやあ。……考え過ぎじゃない?」眠い目をこすりながら未亜が言った。

「だつて、男子がいる部屋、南雲先生もいるんだよ? 例えば、ヘンな薬とかだったら南雲先生に殺されるよ? 先生、そういうのスゴイ厳しいんだから」

そりやそりや。

南雲先生、アウトだけど社会的なルールにはものすごく厳しい人だから。

「そりやそりや」涼子さんはまだ納得出来ない様子で言った。

「でも、何か気になるのよ 女として」

長い廊下を折れた先。

廊下のあちこちに設置された間接照明のおかげで暗さだけはそれほどじやない中、私達は静かに進んだ。

そして

男子が寝ているはずの部屋。

その障子の向こうから、薄く灯りが見えたと迷つたら……。

「!?

私はその音を聞いた途端、凍り付いてしまった。
間違いない。

女の子のアノ声だ。

「ち、ちよつと?」

私は思わず涼子さんの顔を見た。

「ど……どひこひ」とへ。

「……」

涼子さんも凍り付いたらしげ。その場に固まっていた。

「ほりあー逃げるな水瀬！」

その声は間違いなく品田君の声だ。

「次はお前の好きなお姉さんモノや。お前が好きなタイプは調べてあるんや」

「だ、だけども」

「まあ見る」羽山君の声。

「この女優の裏モノは貴重だぜ？ねえ、南雲先生」

「し……品田、わざわざのヤツ、いくらだ？」

「毎度」

静寂の後、別な女の子の声がする。

「なつ？お前の好みやう？」

「……」

「おーお 食に入るよ」見つめて

「し、品田君……いくら？」

「毎度 秋篠はこのルシフォルちゃん似の子やな」

「おお。すまないな」

「……」涼子さん。

「……」ルシフォルさん。

「……」未亜。

「わ……私とこのモノが、こんなに近くにいながら」涼子さん、声が震えてる。

「ひ……博雅君……ど、どひこひ」とへ。うわーっ。ルシフォルさん、髪が逆立つてるよ。

「せ……先生」未亜ーどこからナイフなんて！？
私は廊下に並んで立ちふさがる三人から少しづつ離れた。

後はもう、語る必要もないだろう。

ガラツ！

乱暴に開かれた障子。

凍り付く男子達（プラス男性教諭）に仁王立ちする女子（プラス看護婦）が踏み込んで……。

修羅場の始まりだ。

「ああ……ワイの商売道具が」

品田君が虫の息でそう嘆いていた。そう。今晚の集まりは品田君の新作Hなビデオの上映販売会を兼ねていた。男子が女子のために流しそうめんを企画したのは、恋人に対するやましさがあつたからだろうけど　これが命取りになつたわけだ。

私は葉子の元へ逃げるなり布団を被つちゃつたからよくわかんないけど、夜通し物音や悲鳴や怒号が聞こえていたのだけは覚えている。

翌日。

水瀬君の家の構造が、とても涼しく快適な朝を迎えた私は、布団の中で気持ちよさそうに眠る三人を見つけた。

一瞬、昨晚のことは夢だったのかと思つたけど　。

その日のお昼、私は男子を訪ねて病院へ。

水瀬君は大目に見てもらつたらしいけど、恋人に踏み込まれた他

と、恋人にいかがわしいDVDを売りつけた品田君は無事では済まなかつた。

聞いたところだと、全員、夏休み中は入院してすゝせるらしい。クーラーが利いた部屋でこそしてうらやましこよつな、つらやましくないような……。

……ああ。今日も暑いなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8046z/>

夜と秘密とお楽しみと

2011年12月25日19時47分発行